

冷泉家時雨亭文庫藏『源氏和歌集』詞書考

——歌われた状況を説明する詞書——

品川高志

一、はじめに

『源氏物語』桐壺巻から賢木巻の途中までの和歌が抄出され、詞書を伴った歌集として、冷泉家時雨亭文庫藏『源氏和歌集』（以下、冷泉家本『源氏和歌集』とする）がある。岩坪健氏によれば鎌倉後期に書写された伝本とされ、零本ではあるが、その時代を遡る伝本が無いことから注目される資料と言えよう^①。さらに注目すべき点として、冷泉家本『源氏和歌集』の和歌の詞書は、藤原定家監督本とも呼べる『物語二百番歌合』の詞書と類似した表現があり、『物語二百番歌合』の詞書にある現存の『源氏物語』伝本には見られない表現に類似したものまでがある。岩坪氏はその点に注目し『物語二百番歌合』は冷泉家本『源氏和歌集』のような「源氏集」をもとにしたのではないかと推測されている。また、田中登氏は、松尾

切の詞書と冷泉家本『源氏和歌集』の詞書を比較し、松尾切の詞書が『源氏物語』本文から大きく逸脱していないのに対して、冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は物語の出来事を客観的に説明しようとしたものとしている^③。そして、田中氏は、『物語二百番歌合』との詞書の類似や、冷泉家に伝来した点を考慮に入れば、定家、もしくは、その近辺での編纂の可能性も一応は視野に入れてみるべきかもしれないとしている。先学の指摘の通り、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の詞書が類似しており、また、現存『源氏物語』伝本に見られない記述を共有している例が少なくないことから、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の関係が近いことが窺えよう。

しかし、その一方で、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の共通歌の詞書は類似しているもののほとんどが微妙に異なっ

ている点、もちろん、中には類似していない詞書もある点が問題として残されている。本稿では、そのような詞書の差異に注目し、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の詞書、『風葉和歌集』の詞書などの比較をする。まず、第二節では冷泉家本『源氏和歌集』の詞書の性質は、『物語二百番歌合』の詞書の性質とは異なり、歌われた状況を説明するのに徹した詞書であることを明らかにする。次に、第三節では冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は出来事を外から記述したのではなく詠者の内面にまで入って説明したものであることを指摘する。第四節では冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は源氏と藤壺の関係を秘そうとする意識は無く、あくまで説明に徹したものであることを指摘する。以上の考察をもつて、冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は『物語二百番歌合』の詞書とは異なった性質を持っていることを明らかにする。

二、詞書における叙述の関心

まず、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の類似している詞書に見られる違いを具体的に見ていく。引用本文はまず『源氏物語』をあげ、次に冷泉家本『源氏和歌集』、そして他の和歌作品をあげていく（引用本文については巻末に記し、『源氏物語』本文と各々の和歌作品間で共通している表現は太字にし、各々の和歌

作品の詞書間で共通している表現は傍線を付した）。

① 『源氏物語』本文・紅葉賀・一卷・三四七・三四八頁

七月にぞ后るたまふめりし。源氏の君宰相になりたまひぬ。（中略）
参りたまふ夜の御供に宰相の君もつかうまつりたまふ。同じ宮と聞
こゆるなかにも、后腹の皇女、玉光りかかやきて、たぐひなき御お
ぼえにさへものしたまへば、人もいとことに思ひかしづききこえた
り。まして、わりなき御心には、御輿のうちも思ひやられて、いと
どおよびなきこちしたまふに、すずろはしきまでなむ。

つきもせぬ心のやみにくるかな雲居くもぬに人を見るにつけても

冷泉家本『源氏和歌集』・一〇〇

ふちつばさぎのくらゐにさだまり給て入内の御ともつかうまつり
給けるに

六条院

つきもせず心のやみにくる、かな雲ぬに人を見るにつけても

『物語二百番歌合』（後）・左・三四番

藤壺后にたちていらせ給に御ともにつかうまつらせ給ひて
つきもせぬ心のやみにくる、かなくもぬに人を見るにつけても

冷泉家本『源氏和歌集』の「御ともつかうまつり給」と『物語二百

番歌合』の「御ともにつかうまつらせ給ひ」はともに『源氏物語』

本文の「御供に宰相の君もつかふまつりたまふ」の箇所を引用した
と言える。しかし、冷泉家本『源氏和歌集』の「ふちつばきさゝの
くらゐにさだまり給て」・『物語二百番歌合』の「藤壺后にたちてい
らせ給に」はともに、『源氏物語』本文の「七月にぞ后ゐたまふめ
りし」の箇所をもとにしていても言えそうだが、「藤壺」という
呼称を用いて説明し直されたものであり、現存の『源氏物語』伝本
には見られない表現である。これと同種の表現は梗概書である『源
氏大鏡』にもみられ「つきもせぬ」の歌の前の表現に「こうきでん
の女御をこえて、此巻に藤壺ささきにたち給へば、中宮と申けり」
という記述がある。冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』
は、ともに「藤壺后」で始まり、同内容の現存する『源氏物語』伝
本に見られない表現を用いていることから、なんらかの関係があ
ったことが想定されよう。しかし、冷泉家本『源氏和歌集』では
「ささゐのくらゐ」・「入内の御とも」となっているのに対して、『物
語二百番歌合』ではそれぞれ「くらゐ」「入内の」という記述は無
く、『物語二百番歌合』は冷泉家本『源氏和歌集』より簡略化され
た詞書とも言える違いがみられる。逆に、『物語二百番歌合』の詞
書よりも具体的な説明となっている。同様の例として次の例をあげ

る。

② 『源氏物語』本文・賢木・二卷・一一六―一一八頁

人わらくつれづれにおぼさるれば、秋の野も見たまひがてら、雲林
院にまうでたまへり。故母御息所の御兄の律師の籠りたまへる坊に
て、法文など読み、行ひせむとおぼして、二三日おはするに、あは
れなること多かり。(中略)陸奥国紙にうちとけ書きたまへるさへ
ぞめでたき。

浅茅生の露の宿りに君をおきて四方のあらしぞ静心なき

などこまやかなるに、女君もうち泣きたまひぬ。御返し、白き色紙
に、

風吹けばまづぞ乱るる色変はる浅茅露にかかるささがに

冷泉家本『源氏和歌集』・一五〇・一五二

諒闇のとし雲林院にて法文などならひて日比おはせしころむら
さきのうへにつかはしける
六條院

あさぢふの露のやどりに君を、きてよもの嵐にしづ心なき

御返ししろきしきしに
むらさきのうへ

風ふけばまづぞみだる、色かはるあさぢがすゑにかよふさ、がに

『物語二百番歌合』（前）・左・十三番

諒闇の年雲林院に法文などならひ給て日ごろおはせしむらさ
きのうへに

あさぢふのつゆのやどりに君をおきてよものあらしぞしづ心なき

『同』（後）・左・八十一番

つゆのやどりに君をおきてと侍ける御返　むらさきのうへ
かせふけばまづぞみだるるいろかはるあさぢがつゆにかかるささに

『風葉和歌集』・秋下・三三八・三三九

あきのゝも御らんじがてら雲林院におはしましけるころ紫のう
へにつかはさせ給ひける　六条院御歌

あさぢふの露のやどりに君をおきてよもの風ぞしづ心なき
かへし

風ふけばまづぞみだる、色かはる浅ちが露にかゝるさ、がに

「あさぢふの」の歌の詞書において、冷泉家本『源氏和歌集』、『物
語二百番歌合』、『風葉和歌集』の三つとも、紫の上に贈ったという

『源氏物語』本文をダイジェスト化した表現を用いている。『風葉和

歌集』では「あきの、も御らんじがてら雲林院」と『源氏物語』本
文と近い表現を用いているのに対して、冷泉家本『源氏和歌集』と
『物語二百番歌合』の詞書はともに「諒闇のとし」という『源氏物
語』本文にみられない表現を用いており、かつ、似通っていること
から、その近さが窺える。しかし、冷泉家本『源氏和歌集』の「あ
さぢふの」歌の詞書の末尾は「むらさきのうへにつかはしける」で
締められているのに対して、『物語二百番歌合』は「むらさきのう
へに」となっており、「つかはしける」が省略されているともこれ
る表現となっている。『風葉和歌集』では「つかはせ給ひける」と
なっており、この詞書の締められ方の点では、冷泉家本『源氏和歌
集』と近いと言えよう。また、続く「風ふけば」の歌の詞書である
が、冷泉家本『源氏和歌集』では「御返ししろきしきに」と『源
氏物語』本文を引用した表現になっているのに対して、『物語二百
番歌合』の同歌の詞書は「あさぢふの」の歌の返歌であることが示
されているだけで簡略化された表現である。冷泉家本『源氏和歌
集』では『物語二百番歌合』と違い、「御返ししろきしきに」と
『源氏物語』本文にもある表現を用いて、「しろきしきし」で歌を返
したという状況がわかる詞書となっている。このように冷泉家本
『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の詞書は似ている例であって
も、冷泉家本『源氏和歌集』に対して、『物語二百番歌合』の詞書

の方が簡略化された表現になっている傾向がみられる。次の例も同様である。

③ 『源氏物語』 本文・賢木・二巻・一〇五頁―一〇六頁

かの昔おぼへたる細殿の局に、中納言の君まぎらはして入れたてまつる。(中略) ほどなく明けゆくにやとおほゆるに、ただここにしも、「殿ぬ申さぶらふ」と声づくるなり。またこのわたりに隠るへたる近衛司ぞあるべき、腹ぎたなきかたへの教へおこするぞかし、と大将は聞きたまふ。をかしきものから、わづらはし。ここかしこ尋ねありきて、「寅ひとつ」と申すなり。女君、

心からかたがた袖を濡らすかなあくと教ふる声につけても
とのたまふさま、はかなだちて、いとをかし。

嘆きつつわがよはかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞともなく
静心なくていでたまひぬ。

冷泉家本『源氏和歌集』・一四六・一四七

弘徽殿のほそ殿にしのびてあかし給夜殿ぬ申こゑとら一とぞう
しけるをき、て
隴月夜の内侍のかみ
心からかたぐのぬる、かなあくとおしふる聲につけても
御返し

冷泉家時雨亭文庫蔵『源氏和歌集』詞書考

六條院

なげきつ、わが世はかくてすぐせとやむねのあくべき時ぞともなく

『物語二百番歌合』(後)・左・八十九番

弘徽殿のほそ殿にてとのぬ申のこゑきこえけるに

心からかたぐそでをぬらすかなあくとをしふるこゑにつけても
三条の内侍かみ

『物語二百番歌合』(前)・左・十七番

弘徽殿のほそどのにしのびてあかしたまふよ殿ぬ申のこゑきこ
えけるに

なげきつ、わがよはかくてすぐせとやむねのあくべき時ぞともなく
差異に注目すると、冷泉家本『源氏和歌集』の「とら一」という
『源氏物語』本文にみられる表現が『物語二百番歌合』では見られ
ず、『物語二百番歌合』では「きこえける」の内容が省略されてい
る。また、冷泉家本『源氏和歌集』は「こゑぞうしけるをき、て」と
『源氏物語』本文の「申す」と異なる「ぞうし」た「こゑ」を聞
いたとなっているが、『物語二百番歌合』では「こゑきこえける」と
簡略化されている。田淵句美子氏が『物語二百番歌合』の詞書に
ついて、「和歌の読解に必要な情報だけを端的に記し、書かなくて

も良いことは書かず、和歌の表現性を重んじ、一首の和歌に語らせようとすると指摘しているように、『物語二百番歌合』の簡略化された詞書は必要な情報だけを示すものだとということが窺える^④。たしかに、「とのみ申のこゑきこえける」という表現は、歌の「あく」と教ふる声につけても」の夜明けを告げる声という内容理解に必要であるが、「真一つ」という言葉は歌の「あくと教ふる」と重なってしまつたため和歌の読解の情報としては不要である。一方、冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は「とら一」と『源氏物語』本文にある表現で「殿み申」の内容が具体的内容として記述され、その「こゑ」を「そうしけるをき、て」と『物語二百番歌合』の詞書よりも歌われた状況が具体的に説明されている詞書となっている。

したがって、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の詞書は類似している例であっても、両者の詞書は叙述の関心が違つと言えよう。『物語二百番歌合』の詞書は歌の内容がわかる最低限の情報を示す性質に対して、冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は歌われた状況を説明する性質という違いがあると考ええる。

三、詞書における詠者の心情描写

田淵氏は、『物語二百番歌合』と『風葉和歌集』の詞書の叙述の違いについて、『物語二百番歌合』は読者の外側からの記述であり、

立ち位置が詠者の外側であるのに対して、『風葉集』は、物語の文章を生かし、物語の作中人物、詠者の心に寄り添い、内側から記述する」と指摘している^⑤。このような叙述の違いは、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』にもみられる。次の例である。

④ 『源氏物語』・夕顔・一巻・一八九頁

かの伊予の家の小君参るをりあれど、ことにありしやうなることつてもしたまはねば、憂しとおぼしはてにけるをいとほしと思ふに、かくわづらひたまふを聞きて、さすがにうち嘆きけり。遠くくだりなどするを、さすがに心細ければ、おぼし忘れぬるかと思ひに、「うけたまはり悩むを、ことにいでてはえこそ、

問はぬをなとかと問はでほどふるにいかばかりかは思ひ乱る

益田はまことになむ」と聞こえたり。

冷泉家本『源氏和歌集』・三七

夕がほの露きえにし御物おもひの比久しくおとづれ給はざりければおぼしわすれぬるかと思ひに申ける

とはぬをなとかとはでほどふるをいかばかりかはおもひわづらふ

『物語二百番歌合』(後)・左・三七番

ゆふがほのつゆきえてのち御心のまぎれかきたえおとづれたま
はぬに思ひわびて

うつせみのあま君

とはぬをもなどかと、はでほどふるにいかばかりかはおもひみだる

『源氏物語歌合』・左・五十一番

遠く下りなんとするを思ふもさすがに心細ければおぼし忘れぬ
るかところみむとて

問はぬをもなどかと問はで程ふるをいかばかりかは思ひわづらふ

この場合、『源氏物語歌合』の詞書が『源氏物語』本文をほぼそのまま踏襲した表現であるのに対して、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の詞書は「ゆふがほの露消え」というダイジェスト化した本文を用いた類似表現と言える。しかし、冷泉家本『源氏和歌集』では「おぼしわすれぬるかと心みに」という本文の表現を用いているのに対して、『物語二百番歌合』では「思ひわびて」と現存の『源氏物語』本文に見られない簡略化された表現となっている。この場合、冷泉家本『源氏和歌集』の「おぼしわすれぬるかと心みに」という空蟬の心情表現は和歌中の「とはぬをもなど

かとはでほどふるを」と重なっているため、和歌に心情を語らせるならば不要な表現である。この詞書は、歌われた状況を具体的に説明しているだけではなく、「おぼしわすれぬるか」という空蟬の心中の内面にまで入った叙述となっている。それと異なり『物語二百番歌合』の詞書は「思ひわびて」とだけ外側から語っており、あくまで空蟬の心情の中身は和歌で綴られているのである。次の例も同様である。

⑤ 『源氏物語』・賢木・二卷・九三頁

心にくくよしある御けはひなれば、物見車多かる日なり。申の時に、内裏に参りたまふ。御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の限りなき筋におぼし心ざして、いつきたてまつりたまひしありさま変はりて、末の世に内裏うちを見たまふにも、ものみつきせずあはれにおぼさる。十六にて故宮に参りたまひて、二十にておくれたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける。

そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにもぞ悲しき

冷泉家本『源氏和歌集』・一三九

齋宮群行の日又も、しきのみ給てちゝおとゞのことなどおぼし
出られければ

そのかみをさらにかけじとしのぶれど心のうちに物ぞかなしき

『物語二百番歌合』(後)・左・一八番

齋宮群行日又ももしきの内を見たまひてせんほうの御時ちちお

とどのことなど思ひいでて

前坊宮すん所

そのかみをけふはかけじとおもへども心のうちにものぞかなしき

冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の詞書はともに、

『源氏物語』本文の表現とは異なるダイジェスト化した表現を用い

ており、両者の詞書は非常に似ている。岩坪氏は物語に無い「齋宮

群行」という語句が共通していることを指摘し、この語句は『物語

二百番歌合』が冷泉家本『源氏和歌集』のような類のものから引用

したのではないかと推測している^⑥。しかし、一点異なる点として

詞書の末尾が、冷泉家本『源氏和歌集』では「おぼし出られけれ

は」と自発の助動詞「らる」を用いていた表現になっているのに対

して、『物語二百番歌合』は「思ひいでて」となっている。この場

合、詞書は非常に似ているものの、冷泉家本『源氏和歌集』では自

発の助動詞を用いて、内面から心情を描いた叙述となっているのに

対して、『物語二百番歌合』は心情を外から描いた叙述となってい

ると言えよう。詞書における心情面の描写の違いは次の例にもみら

れる。

⑥ 『源氏物語』本文・若紫・一卷・二一九頁

暁がたになりければ、法華三昧行ふ堂の懺法の声、山おろしにつ

きて聞こえ来る、いと尊く、滝の音に響きあひたり。

吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな

冷泉家本『源氏和歌集』・四九

おなじ所にて山おろし瀧のをとにひゞきあひていとあはれなり

ければ

吹まよふみ山おろしに夢さめて涙もよをす瀧のをとかな

な

『物語二百番歌合』(前)・左・七十番

中将におはせし時きた山にたびねして

ふきまよふみやまおろしにゆめさめてなみだもよをすたきのをとか

な

『風葉和歌集』・雑二・一三〇〇

北山におはしましたりけるにあかつきかたにせんほうのこ糸山

おろしにつきてたきのおとにひゞきあひたるに 六条院御歌

吹まよふみ山おろしに夢さめて涙もよほすたきのおとかな

冷泉家本『源氏和歌集』の詞書「おなし所にて」は、二首前の「はつ草の」の歌の詞書に「北山にて」とあるので、これら三つの作品とも、詞書で「北山」にいたことを明示しているのは共通している。しかし、冷泉家本『源氏和歌集』と『風葉和歌集』の詞書は『源氏物語』本文にある「山おろし」と「たきのをとにひゞきあひたり」を用いているのに対して、『物語二百番歌合』は「たひねして」とのみ記す。「山おろし」、「たきのをとにひゞきあひたり」は、和歌中の表現と重なるため、歌を解釈するための最低限の情報とする場合、不要なものとなる。『物語二百番歌合』の詞書は歌を解釈するための最低限の記述となっている一方、『源氏和歌集』と『風葉和歌集』はともに歌われた状況を説明する詞書となっており、性質としては近いように思われる。ただし、この両者にも違いがみられる。冷泉家本『源氏和歌集』の詞書には、現存の『源氏物語』本文にみられない「いとあはれなりければ」という源氏の心情表現があるのに対して、『風葉和歌集』の詞書は『源氏物語』本文に留まった表現である。『風葉和歌集』の詞書について、西本寮子氏が『源氏物語』にみられる心情語を排除し簡略化していることを指摘しているごとくであろう^⑦。「いとあはれなりければ」という『源氏物語』本

文にみられない記述があることで、源氏の心情も具体的に説明されていることになる。さらに『風葉和歌集』の詞書と比較する。

⑦ 『源氏物語』本文・葵・二卷・四八頁

鈍める御衣たてまつれるも、夢のこちして、われ先だたましかば、深くぞ染そめたまはまし、とおぼすさへ（※）、

限りあれば薄墨ころも浅けれど涙ぞ袖をふちとなしける

※河内本では「おぼすさへ」が「おもほすさへあはれにて」となっている。

冷泉家本『源氏和歌集』・一一九

あふひのうへかくれにけるのちかぎりある事にてにぶめる御ぞき給も夢の心地してわれさきた、ましかばふかくぞ、めましとおぼすもかなしくて

限あればうすゞみ衣あさけれど涙ぞ袖をふちとなしける

『風葉和歌集』・哀傷・六七〇

あふひのうへかくれてのちにはめる御ぞたてまつれるにつけてもわれさきた、ましかばふかくぞそめ給はましとおぼされて

かぎりあればうすゝみ衣浅けれど涙ぞ袖をふちとなしける

『源氏和歌集』と『風葉和歌集』の詞書はどちらも殆ど『源氏物語』

本文を抜粋したもので構成されており、類似している表現と言えよう。しかし、詞書の末尾において、冷泉家本『源氏和歌集』では

「かなしくて」という光源氏の心情表現を用いているのに対して、

『風葉和歌集』は「おほされて」という形で留めており、心情表現が書かれていない。『源氏物語』本文においても、河内本は「おも

ほすさへあはれにて」と心情をより具体的に説明している記述になつて

いるのに対して、大島本などでは「おほすさへ」という形で源氏の心情表現は省略されている。冷泉家本『源氏和歌集』が「かな

しくて」とある本の表現によつており、『風葉和歌集』が河内本でない本の表現によつて

いるという可能性もあるが、いずれにせよ、冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は『風葉和歌集』の詞書と比べて、心情語を残し、より歌われた状況を説明している叙述となつて

いると言えよう。したがつて、詞書における詠者の心情描写については、『物語二

百首歌合』は心情を外から叙述するのに対して、冷泉家本『源氏和歌集』・『風葉和歌集』は詠者の内面にまで入つた叙述をしていると言えよう。さらには、冷泉家本『源氏和歌集』は『風葉和歌集』の

それよりも心情面を具体的に説明している叙述となつて

四、詞書における源氏と藤壺の関係の記述

源氏と藤壺の関係について記した詞書を比較していき

たい。次の例である。

⑧ 『源氏物語』本文・若紫・一卷・二二二頁
くらぶの山に宿りもとらまほしげなれど（※）、あやくなる短夜

にて、あさましようかなかかなり。
見てもまたあふよまれなる夢のうちにやがてまぎるるわが身と
もがな

とむせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

世語りに人や伝へむたくひなく憂き身をさめぬ夢になしても
おほし乱れたるさまも、いとことわりにかたじけなし。命婦の

君ぞ、御直衣などは、かきあつめもて来たる。

※河内本は「とらまほしげなれど」が「とらまほしくおほえ給へ
と」となつて

いる。冷泉家本『源氏和歌集』・六〇・六一

中将におはせし時かぎりなくしのびたる所にてくらぶの山にや
どりもせまほしけれどあやにくなるみじか夜さへほどなかりけ
れば中／＼にて
六條院

見てもまたあふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎる、我身ともがな
むせかへり給さまもさすがにいみじければ御かへし 薄雲るむ
よがたりに人やつたへむたぐひなくうき身をさめぬ夢になしても

『物語二百番歌合』(前)・左・一番

中将ときこえし時かぎりなくしのびたる所にてあやにくなるみ
じか夜さへほどなかりければ
六條院

見ても又あふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎる、わか身ともがな

『物語二百番歌合』(後)・左・二二番

やがてまぎる、我が身ともがなと侍りける御返し(※)

入道ささいの宮

世がたりに人やつたへむたぐひなくうき身をさめぬゆめになしても

※定家監督本では詞書無し。

『風葉和歌集』・恋二・八七〇・八七一

いとしのびたる処におはしましたりけるにあやにくなるみじか

冷泉家時雨亭文庫蔵『源氏和歌集』詞書考

夜にてあさましようなか／＼なりければ

みても又あふよまれなる夢のうちにやがてまぎる、我身ともがな
御かへし

世がたりに人やつたへんたぐひなくうき身をさめぬ夢になしても

『源氏物語歌合』・左・十番 六條院

藤壺の宮わづらひ給ふことありてまかで給へり。いかがたばか
り給ひけん、いとわりなきさまにて見たてまつり給ふ。なにこ
とをかきこえつくしたまはん。くらぶの山にやどりもとらまほ
しくおぼえ給へどあやにくなるみじかよにてあさましようなか
かなれば

見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるる我が身ともがな

四つの歌集とも『源氏物語』本文にある「あやにくなるみじか夜」
を共有しているが、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』
の詞書の書き出しは、ともに「中将」・「かぎりなくしのびたる所
にて」を共有するダイジェスト化した本文となっている。『源氏物語』
本文にはないダイジェスト化した表現が類似していることから、
なんらかの關係が想定される。しかし、『物語二百番歌合』では冷
泉家本『源氏和歌集』にある「くらぶの山にやどりもせまほしけれ

ど・中くにて」という本文からの引用表現が無い叙述となっている。「くらぶの山にやどりもせまほしけれど」という表現は、和歌中の「夢のうちにやがてまざる、我身ともがな」という内容と重なる。また、「中くにて」も短い夜がかえって嘆かわしいという意味であり、これも歌の内容と重なってしまう。和歌で心情を語るとすれば、必要では無い表現と言えよう。逆に冷泉家本『源氏和歌集』は、物語に引きずられているとも言える一方、これらの記述があることで、和歌の詠われた状況、すなわち、光源氏の嘆く状況が詞書において具体的に説明された叙述となっている。この場合、『風葉和歌集』と『源氏物語歌合』の詞書にもそれがあてはまるといえる。この例においても、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の詞書は、類似表現を共有するものの、冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は歌われた状況を説明する性質に対して、『物語二百番歌合』の詞書は和歌の最低限の情報を示す性質となっている違いがみられるのである。さらに、注目したいのが、「見てもまた」の歌に続く、「よがたりに」の歌の詞書である。冷泉家本『源氏和歌集』では、「むせかへり給さまもさすがにいみじければ御かへし」と『源氏物語』本文にある藤壺の心情表現をそのまま引用した詞書となっている。一方、『物語』二百番歌合』においては、定家監督本の場合詞書が無く、源氏の歌である「見ても又」への返歌であるこ

とが明示されていない。この詞書が無いことについては、渡瀬茂氏は「うたが中心であり、他は副次的・恣意的である」ことによるとし、詞書が無く一首をめぐる状況など一切が秘匿されているが、「詠者の心の中でのみ響くうた」としている^⑧。田淵句美子氏は渡瀬氏の論に同意し難いとし、勅撰集の体裁のように源氏と藤壺の密事を書くことを避けているものによるとしている^⑨。いずれにせよ、詞書が無いことで、源氏と藤壺の贈答歌であることは秘せられていると言える。一方、『風葉和歌集』の詞書について、田淵氏は「御かへし」とあり源氏と藤壺の贈答歌であることを示していること、恋部の部立であることから、禁忌の意識は無いと指摘している。冷泉家本『源氏和歌集』の詞書も同じように源氏と藤壺の贈答歌であることを示し、さらに藤壺の心情まで具体的に説明しているのであり、その詞書はあくまで歌われた状況を説明することに徹しているように思われる。同じようなことが次の例にもみられる。

⑨ 『源氏物語』本文・賢木・二巻・一二四―一二六頁
二十日の月やうやうさしいでて、をかしきほどなるに、(中略)月のはなやかなるに、昔かうやうなるをりは、御遊びせさせたまひて、いまめかしうもてなさせたまひし、などおぼしいづるに、同じ御垣のうちながら、変はれること多く悲し。

九重に霧や隔つる雲の上の月をはるかに思ひやるかな
と命婦して聞こえ伝へたまふ。

冷泉家本『源氏和歌集』・(一五四・詞書のみで歌無し)

院かくれさせ給てつぎのとし八月十五夜王命婦して六條院にき
こえ給ける

『物語二百番歌合』(前)・左・六十九番

故院かくれさせ給てつぎのとし八月十五夜に 入道の宮

ここのへにきりやへだつるくものうへの月をはるかにおもひやるか
な

冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の詞書は御物本『源氏物語』にしか見られない「八月十五夜」という表現があり、類似している表現と言えよう^⑧。しかし、『物語二百番歌合』の詞書には冷泉家本『源氏和歌集』の詞書にある「王命婦して六條院にきこえ給ける」という『源氏物語』本文にも見られる記述が無いという違いがある。この記述は、藤壺が王命婦を遣つて源氏に贈った歌であることを示しているものであり、その詞書が無い場合、源氏との贈答歌であることがわからず、藤壺の独詠歌とも捉えることができよ

う。まさに、『物語二百番歌合』の詞書はそのようなことがあてはまると言え、源氏と藤壺の関係をあからさまにしない表現となっているのである。一方、冷泉家本『源氏和歌集』には源氏と藤壺の関係を秘そうとする意識は無く、藤壺が源氏に贈った歌という歌われた状況を説明している。『物語二百番歌合』は源氏と藤壺の関係をあからさまにすることを避けているが、冷泉家本『源氏和歌集』はそれを避けようとせずあくまでも贈答された状況を説明しているという違いが見られる。

五、まとめに

以上、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』などの詞書の比較をしてきた。冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は『物語二百番歌合』の詞書と類似するものの、詞書の性質が違うと言える。『物語二百番歌合』の詞書は歌に心情を語らせるために必要な最低限の情報となつている。心情表現を外から記述し、また、源氏と藤壺の関係の記述は避けられている。それ故、冷泉家本『源氏和歌集』よりも簡略化された表現になっている場合もあり、物語と異なつた理解ができてしまう場合もある。一方、冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は歌われた状況を具体的に説明することに徹していることで、それは歌の内容とも重なる場合もあり、詠者の心情を内側から具体的に

に説明し、源氏と藤壺の関係の記述も避けようとしていない。このような点で、冷泉家本『源氏和歌集』と『物語二百番歌合』の詞書は叙述の関心が違ふと考え、冷泉家本『源氏和歌集』の詞書は『物語二百番歌合』に類似しているものの、その性質は物語歌集である『風葉和歌集』に近い場合もある。ただし、『風葉和歌集』では心情語を簡略化する傾向があるのに対して、冷泉家本『源氏和歌集』の詞書では心情語も明記し、より本文の状況を説明しようとする違いがみられる。思うに、物語本文をほぼそのまま引用した詞書とは別に、物語歌集・物語歌合には冷泉家本『源氏和歌集』や『風葉和歌集』のような物語で歌われた状況を説明する詞書を持つタイプと、『物語二百番歌合』のような歌の理解に必要な最低限の情報として示す詞書を持つタイプがあったのではなからうか。もし、冷泉家本『源氏和歌集』の類の詞書を持つ源氏集が定家周辺にあったとしたら、定家の息子が家以後においても、『物語二百番歌合』タイプの詞書と冷泉家本『源氏和歌集』タイプの詞書が周辺に存在したと言え、詞書の書き分けがされていた可能性もあると推測できよう。^⑩

注

- ① 岩坪健「源氏和歌集上 解題」（冷泉家時雨亭文庫編『大鏡・文選・源氏和歌集・拾遺』（朝日新聞社、平成二〇年）所収）。

② 『物語二百番歌合』には藤原定家自筆本とされる穂久邇文庫本があるが、実質には藤原定家監督本であり、本稿ではそのように述べる。

③ 田中登「源氏集」の種々相（森一郎、岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望』第六輯）（三弥井書店、平成二二年）所収。

④ 田淵句美子「風葉和歌集」の編纂と特質」（小嶋菜温子・渡部泰明編『源氏物語と和歌』（青蘭社、平成二〇年）所収）。

⑤ 注④に同じ。

⑥ 注①に同じ。

⑦ 西本寮子「風葉和歌集」詞書考序説」（広島女子大國文）（平成五年九月）所収）。

⑧ 渡瀬茂「物語二百番歌合」藤壺関係歌をめぐって——『源氏物語』歌の一享受」（『研究と資料』（昭和五八年七月）所収）。

⑨ 田淵句美子「物語二百番歌合」の成立と構造」（『国語と国文学』（平成一六年五月）所収）。

⑩ 「八月十五夜」の表記については、伊井春樹「物語二百番歌合の本——定家所持本源氏物語の性格」（大阪大学『語文』昭和四二年二月）、注①掲載論文によって指摘されている。

⑪ 田淵氏は注④引用『風葉和歌集』の編纂と特質」にて、『物語二百番歌合』と『風葉和歌集』における詞書の性質の違いや為家の歌から『風葉和歌集』作者を藤原為家とするのは考え難いとしている。しかし、為家周辺において、冷泉家本『源氏和歌集』のような詞書を持つ源氏集があった可能性もあり、詞書の性質の点からでは為家説を否定することには躊躇される。

※本稿で用いた本文は次の通りである。ただし、私意により漢字、清濁、句読点等の表記を改めた箇所がある。

- 『源氏物語』は伊井春樹編『CD-ROM 角川古典大観源氏物語』（角川書店、平成十一年）による。ただし、便宜上、阿部秋生他編『新編日本古典文学全集 源氏物語一』二（小学館、平成六、七、七年）の巻・頁数を付した。なお、『源氏物語』の諸本に関しては、池田亀鑑編『源氏物語大成 校異編 普及版』（中央公論社、昭和五九、六〇年）・加藤洋介編『河内本源氏物語校異集成』（風間書房、平成一三年）・源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』（桜楓社、現・おうふう）、平成元、一四年）・源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成統』（おうふう、平成一七年）・池田和臣編『飯島本源氏物語』（笠間書院、平成二〇、二一年）を参照した。
- 冷泉家本『源氏和歌集』は冷泉家時雨亭文庫編『大鏡・文選・源氏和歌集・拾遺』（朝日新聞社、平成二〇年）による。歌番号は『新編国歌大観』の番号による。
- 『物語二百番歌合』は池田利夫・藤井隆編『日本古典文学影印叢刊一四 物語二百番歌合 風葉和歌集桂切』（貴重書刊行会、昭和五五年）による。また、竹本元暉・久曾神昇編著『定家自筆本物語二百番歌合と研究』（未刊国文資料刊行会、昭和三〇年）の翻刻を参照した。
- 『風葉和歌集』は中野莊次・藤井隆著『増訂校本風葉和歌集』（友山文庫、昭和四五年）による。
- 『源氏物語歌合』は樋口芳麻呂編『王朝物語秀歌選（下） 風葉和歌集 下・源氏物語歌合』（岩波書店、平成元年）による。
- 『源氏大鏡』は石田穰二・茅場康雄編『源氏大鏡（訂正版）』（古典文庫、平成元年）による。